られた書写用小文字体が発見されて注目を浴びている。しかしこの系列で現在まで生き残ったのは、アルファベットから音節文字への変換を遂げたエチオピア文字だけである。この変換にインドのブラーフミーの文字が影響を与えたと推量する者もいる。

アルファベットに限らず文字の起源と発展に関する研究は、ただ単に文字形の変化や伝播の過程を追うだけではなく、それらの背景や要因を歴史的に考察することによって、一層の実りを期待することができるのではなかろうか。

第四一七回　六月八日（火）

甲骨文字の〝解読〟

東京大学教授　松丸道雄

一九世紀末に甲骨文字が発見されて以来、早くも九〇年以上が過ぎた。その間、多数の研究者の研究によって、殷代史の解明が飛躍的に進展したものは周知の通りであるが、その基礎となったのは、甲骨文字そのものの〝解読〟にあった。甲骨文発見後、かなり短時日の間にその内容が読み解かれたのであり、それは、宋代以降の永い研究蓄積をもつ古文字研究、とりわけ、金文研究の成果があったためだ、と考えられている。

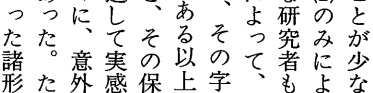
そのことにもとより誤りはないのだが、古文字、古文献の〝解読〟といっても、音標文字によって表記された古文献を解読する場合と、漢字のような、原理的には一語一字をもって表記する、いわば〝多字文字〟を対象とする場合とでは、その〝解読〟の方法および内容が根本的に相違する。かつ、甲骨文の場合、その形体上の変化はあるにしても、系譜的に辿られる漢字が、今も用いられている。

数年に及ぶわが研究所のプロジェクトにより、この甲骨研究史九〇年間に甲骨文字各々の読解について出現した諸説を蒐集する作業を行ない、約二千五百種の著作・論文等のうちから、約三万枚のカードを作成することが出来た。これを、整理・編集し、全甲骨文字に対して、従来の研究者が、どのような解を与えたかを検索しうる書物を刊行すべく努力し、目下作業は最終段階に来ている（松丸道雄・高嶋謙一共編『甲骨文字字釈総覧』東京大学東洋文化研究所・東大出版会刊）。これは一面で、各字についての解読史といった性格をも兼有することになる。その過程で実感された、甲骨文解読上の問題点について、一、二、挙例して

みたい。

甲骨文字を解読するための方法論は、おそらく、(1)古文字学的方法と、(2)用例の帰納法のふたつしかない。(1)は、最も普遍的な方法である。漢字は、形・音・義という三要素より成り立つ。このうちまず甲骨文字の形を問題とし、それ以後の金文・簡牘・璽印等の古文字や『説文』正文との間の字形上の連続性を確認し、今文（今の楷書）のどの字に相当するかを考える。次にその義を考えるには、まず『説文』がその文字の本義としてどのような解釈を与えているかを検討する（本義）。これで解釈しがたいときは、『爾雅』『広雅』『方言』などを根拠に、その転義を考慮の対象とする（転注義）。音韻学上の知識――ことに清朝以降の上古漢語についての研究成果――も参照されることがある（仮借義。ただし、上古漢語再構のための資料と甲骨文との間には、音韻学上無視しがたい、時間的・空間的ズレがある）。(2)は、後世の漢字に引き当てることを敢てせず（ないし断念し）、甲骨文の範囲的で、その用例をくまなく蒐集し、比較検討するなかから、字義の範囲を限定しようとする方法である（尚、字形学的研討の上で、人名・地名等の固有名詞を史書をはじめとする古典中に求める場合があるが、これは別の意味があるので方法として除外しておく）。

現実には、これらの方法を、状況に応じて適宜組み合わせつつ、推定説が提出される場合が多いが、研究者自身に方法論的自覚が乏しい場合が少なくないので、立説の根拠とするのが、右のうちの如何なる方法論に基いているのかを論理的に整理しがたい、といったことが少なくない。しかし、一方で、(1)を極力排し、専ら(2)のみによって甲骨文を理解しようとした島邦男氏のような研究者もいた。

さて、あらましこのような方法論によって、甲骨文字は〝解読〟され、幸いにも多くの場合に、その字義・文義は〝推定〟することが可能になったのである以上、現状での読み方がこれで絶対に確実かというと、その保証は必ずしもあるわけではない。今回の作業を通して実感されたことのひとつが、一字の範囲を確定するのに、意外にも非常に大きな困難が伴なう、ということであった。たとえば、  といった諸形のうち、どれとどれが同字で、どれが別字かについて、研究者間の判断は、実にまちまちであるし、いくつかある字書類でも、一字としての枠の設定の仕方が著しく異なっている。そのこと自体が研究対象だといってしまえばそれまでであるが、その点を曖昧にしたまま、字釈の検討をしても、根底が崩れてしまうことになりかねない。それが未解決のままでは、甲骨文字の字数をどの程度というべきか判然としな

いのは当然であるが、今、通説に従って大約五千字と見做しておくとして、このうち『説文』所収九三五三字中に比定しうるものは、大よそ一三〜四〇〇字であるにすぎない。ということは、この両者の時間差一二〇〇年ほどの間に、三千数百字が消滅してしまっていることを意味するのであり、それらは、『説文』を媒介として今文に比定することは困難で、(1)の方法は無力だ、ということになる。使用頻度の高い文字は多く比定済みではあるものの、これはやはり文字学的には、今後に残された大きな課題であろう。

甲骨文〝解読〟のための作業は、その研究の初期において一定の段階に達したにも拘らず、その全面的検討という観点からすれば、今次のわれわれの整理作業ののち、ようやく研究の緒につくといった感があり、今後に残された分野はまだ広大であるといわざるをえない。